

2021年4月25日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「ヨナのしるし」マタイによる福音書 12章38-45節 高橋彰

◆人々はしるしを欲しがる

38 すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。39 イエスはお答えになった。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。40 つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる。41 ニネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。42 また、南の国の女王は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めよう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまさるものがある。」

◆汚れた靈が戻って来る

43 「汚れた靈は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。44 それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた。45 そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの靈と一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうなると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになろう。」

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

イエスはご自分が「神の靈で悪靈を追い出している」(12:28)ことを示されました。それを聞いた律法学者とファリサイ派の人びとは「先生、しるしを見せてください」(38)とイエスに要求しました。ファリサイ派の人びとも律法に学び、神を信じて、人びとに神の意志を教えようとしていましたから、イエスの教えを聞き、癒しの業を見て、何かただならぬものを、無視できないものを感じ取っていたわけです。しかもその教えには力があり、いやしの業によって人々が救われている。悪靈の仕業だとこじつけて批判をしても、逆に自分たちが論破されてしまいました。

そこでファリサイ派の人びとは律法学者をも連れてともにイエスの許にいき、もしあなたが言うようにあなたが本当に神から遣わされたメシアだというのならば、その証拠、客観的に証明できる「しるし」を見せてほしいと命令口調で要求しました。そうすれば、吟味し、承認し、説明をして教えることもできるということかもしれません。こうした態度は、相手に真実性の証明責任を負わせ、自分たちはその事実に対する主体的な決断や告白などの意志表明の責任は負わない態度です。第三者的で、解説者の立場に身を置いた指摘であり要求だとも言えます。使徒パウロは「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。」(Iコリント1:22,23)と手紙に書いています。そして「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。」(Iコリント1:21)と訴えました。イエスが神の子救い主であるかどうかは、客観的な証明によってではなく、自分たちがイエスをどう信じて、どう向き合い、告白するのかが大切です。ファリサイ派や律法学者たちは、学問や知識、地位はありました。自分たちの得た知識や経験、見聞きしたことを通してイエスを信じる、そのような決断はしませんでした。神の救いは、イエスが救い主であるかどうかは、旧約の預言やイスラエルの伝承で客観的に保証され、理解できる公式や理屈とは違うのです。それを知れば人が良くなり、替えられるものではありません。イエスは彼らを「よこしまで神に背いた時代の者たち」と厳しくとがめました。神に反逆する強い表現です。そして彼らの求めるよう

しるしはない、ヨナのしるし以外は与えられないと言います。

ヨナは旧約に登場する預言者の一人ですが、神に命じられたのはイスラエルの民に対してではなくアッシリア帝国の都ニネベの人びとに悔い改めを告げることでした。ヨナは異邦人に悔い改めと審きを告げる(つまりは神の救いを伝える)ことなど嫌がって命令を拒み、船で逃亡しますが嵐に遭い、海に投げ込まれ、大魚に呑み込まれ、その腹の中で三日三晩閉じ込められました。そこで祈りと回心により、魚から吐き出されてニネベに行き、悔い改めを宣言します。ニネベの人びとは言うことを聞き、神の罰を免れます。しかしヨナは滅びの預言が回避され実行されなかったことに不服で、自暴自棄になり座り込みます。日陰となっていたとうごまの木の滅びから、神とのやり取りから、神はヨナに、ご自身がニネベの人びとを惜しみ、救う神であることを教えられました。神は生きておられるので、惜しむこと、変えることに対して不自由ではなく、自由な方なのです。

イエスの教えやわざは、目に見える形では、人びとのいやしや回復であったことでしょう。教えは目に見えるしとして残るのはその言葉に生きた人びとがなした業が実を結んで行く時でしょう。しかし人びとの目に見えたものとしては、イエスは十字架にかけられ、殺され、墓に封じ込められたのです。イエスは人びとの嘲りと救い主の証明を求めた「十字架の上から降りる」という奇跡のしるしなどは起こさなかったのです。しかしニネベの人びとでさえも惜しみ、滅びに任せない憐みの神は、イエスの命を復活されられました。イエスは永遠の命として生きておられ、それを聞き、主体的に信じる者たちにも永遠の命が与えられると、福音は伝えています。永遠の命は、この世にあって、神の言葉に聞き、神に立ち帰り、その言葉に生きようと主体的に信仰を告白して生きることによって先取りされるのです。自分の内側を清く正しくきれいにしようとして、掃除して整えておこうとしても主体的な信仰とその教えの言葉に生きることなしには空っぽです。たちまちもっと悪い者が入り込む。しかし神の言葉に生きようとする人びと、神がひとつのいのちを惜しみなく愛され復活させられる方であると信じるとき、わたしたちは、自分の部屋を作るのでない形で永遠の命の実を結びます。